

長嶋茂雄氏が、最近、文化勲章をもらった。野球界のみならず、スポーツ全般でも初めてのことだろうと思うのだが、アメリカならもっと早く受賞していてもおかしくなかった。野球は、文化として根づいているからである。

長嶋は、敗戦後 13 年、世間はまだ落ち着いてはおらず、流行歌に月給が 13800 円だったころのヒーローである。契約金 1800 万円。現在の、モノになるかどうかわからない新人に契約金 1 億円の時代ではない。

日本中が貧しかったのだ。そういう時代、ここぞというときに必ずヒットやホームランを打ち、日本人全体を鼓舞し続けた、不世出の名選手である。客を喜ばすために、ヘルメットをひとつ大きめのものをかぶり、空振りをすると、ヘルメットが飛んで落ちる。簡単なゴロでもいかに華麗に捕球するか、客に見せること、客を喜ばすことを研究してきた。野球 IQ の高さでいえば、たとえば、ランナーが一塁にいる。バントをしたが小フライになった。そのまま捕球してバッターはアウトになる。ところが、そのイニングが終わり、反省しきりである。なぜなら、小フライを直接捕球せず、ワンバウンドさせれば、ダブルプレーにできる。そして、その機会は、すぐ次の回に実現する。

そういう野球のセンスの持ち主なのである。落合が、ボヤク。「いくら打っても、三冠王を何回とっても、長嶋さんの評価を超えられない」……今でこそ、年俸 5 億だとかいくらでもでてきているが、長嶋の評価を超えた選手はでて来ない。

巷間、「ワーッ、この本凄いですね。英語にちゃんと日本語まで書いてある！凄いですね」などという逸話は、お笑い芸人の誰かがつくったもので、いくら何でも、長嶋が英和辞典を見てはしゃぐはずがない。学校の成績はともかく、野球に関しては天才である。巨人軍の監督が講義をしてプレーをいかにするか、などとまとめて話した。このあと、論文を書いてくるように、といったところ、いろんな選手が論文にまとめて書いてきた。長嶋だけが、「大変よくわかりました。」と書いたというのは本当らしいが。

「君は長嶋をみたか？」という題名の本が売れたのも当然といえば当然なのだ。

つまり、象徴としてプロ野球をつくったのは、沢村栄治であるが、これは静岡県草薙球場での試合で、ヤンキース相手に、1 失点に抑えたからである。（そのころのことを知る人に話を聞くと、本当にいいピッチャーは安定していた白系ロシア人であるスタルヒンだという。ここは日本人でなければならぬから、沢村になっただけだが。）

そして、長嶋の出現によって、プロ野球にようやく花が咲いたようになったようなもので、日本プロ野球の「中興の祖」である。

今回の文化勲章にふさわしい人選だ。むしろ遅すぎたほどである。

この長嶋を巡って、カネにしようとする裏の世界ができてそうになったことがある。このとき、普段はいるかいないかわからない日本プロ野球機構が先頭に立って、長嶋を擁護して事なきを得たことがある。

つまり、野球機構は長嶋が国宝クラスの逸材であり、プロ野球の象徴的存在であることを認識していたのである。だから、長嶋に向かってデッドボールを投げるピッチャーはいなかったはずなのだが、三原脩は理解しておらず、投手にビーンボール（逃げ損なうとデッドボールになる、今でいう危険球である。）を投げさせたことがある。2球ほど投げたとき長嶋が怒ってバットをぶら下げて、2〜3歩歩み寄り何事かを言ったところ、投手の顔面が蒼白になって結局デッドボールを以後投げることはなくなった。（投手の名前も覚えているが、ここでは、武士の情け、名は書かない。）日本の至宝をこの程度の投手につぶされてたまるか！ わざと狙ってではなく、結果としてデッドボールになったのには、長嶋も怒らず、ファンも納得していた。5年、10年孤軍奮闘していた長嶋だが、王やら衣笠ら後継者となることができる選手が続々と現れてきた。しかし、長嶋茂雄氏が後年語ったことだが、ペナントレースでもオールスター戦でも、日本シリーズでも、すべて3割以上の打率を遺した選手は、ほかにいない。

衣笠は広島カープの捕手として入団したのが、昭和38年くらいだが、マスク越しに長嶋を見たとき、「これが長嶋か・・・」と感慨無量だったらしい。これは、巨人軍の選手以外の選手のごく普通の反応だった。それほど「長嶋茂雄の名」は、記憶に残るほどの価値があった。阪神の野口（だったと思う）という代打の打者がいた。三塁線を抜きそうなボールを長嶋が好捕し、その翌日、野口に向かって長嶋が「今日もあんなゴロを打ったら、今度はヒットにしてやるから。」野口はすぐに消えていった選手だが、おそらく生涯そのことを自慢していたに違いない。

ところで、野球IQの話にもどると、阪神タイガースは、チーム全体の野球IQが12チーム中もっとも低いのだが、個々人もまあ似たり寄ったりである。いまでこそビッグボスなどとTVや新聞ははやしたてるが、僕から見たら笑止千万。新庄なんかその典型で、2ストライクになったら、客の方がよく知っている。低めのフォークボールを空振り三振。いつまで経っても同じことが繰り返される。そういうのが2人いて、監督の野村がコーチに「どういう教え方をしたのか？」「はい、ボール球を打つな」です。野村がいう。「あいつらには、ストライクにみえているのや。」

またあるときには、2アウトでランナーが一塁にいる。このランナーがその試合に投げていた投手だった。ライト前のヒットで三塁まで走る。当然息を弾ませている。解説者が、「ここは、投手を休ませるために、いかに時間をかせぐかです

ね」で、アナウンサーが反応した直後に次のバッターは、1球目を打って三塁ゴロでチェンジ。ピッチャーは息を弾ませたまま、マウンドに行く。あとは、・・・もう書かないが。・・・解説者とアナウンサーは、「アーあ・・・」

阪神のランナーが二塁にいる。しきりに手を動かしている。ふつうなら、内角とか外角とかを教えている、あるいは球種を教えているとうけとられて、反則になるのだが、解説者が言う、「元々阪神というチームはそういうことをしないチームですから、」と無罪になる。ほんま、別にファンでなくても情けないワ。プロなんだから、これでメシを食ってるんだから、ちょっとは疑われろよ！

長嶋の息子は、プロ野球の選手だった。甲子園球場に行くと、こころない言葉が飛び交う、またびったりの言葉でよく通る声で一言。「バカ息子！」・・・本人が、よく聞こえるんです。

数年後、引退してからも何年も経っている。

明石家さんまの番組で、さんまが感心した。「凄いワこいつら！ビデオをみても、自分らが話題にしていたことを全部忘れとるワ。」3日前のことやのに。さらに数年後、誰かともめたらしく、家の壁に「バカ息子」と大書してあったという。長嶋茂雄氏の知らないところで、名前だけ使われている。

長嶋の息子は親父が偉大過ぎたための犠牲者かもしれない。あるいは、本当のバカか、よくわからない。

長嶋茂雄を語るとき、どうしても外せないのが、天覧試合のサヨナラ・ホームランである。天皇陛下は相撲が好きで、相撲見物には何度も行幸されていたが、「いわゆる敵性スポーツ」である野球については、球場まで足を運ぶことがなかった。だから、戦前戦後通じての最初の天覧試合である。大試合になればなるほど燃える選手としていられていたが、この時には、天皇のそばで説明をしていたコミッショナーが、ここでホームランが出ると、サヨナラ・ホームランと叫び、その時点でゲームは終了します。長嶋君にはその力があります。と言った途端にホームランが飛び出した。阪神の投手は村山実。長嶋の笑顔と対照的に村山が塁間のラインを無表情で超えていくのが印象的であった。そして、村山は、生涯、あれはファールだ、と語っていた。・・・この試合には両軍総出で、阪神の投手は、のちの300勝投手の小山、王もホームランを放っていたが、長嶋の陰に隠れて話題にもものぼらなかった。そういう巡りあわせと言うか、持って生まれた強運といい、まさにプロ野球のために生まれた男である。

そのお蔭で、プロ野球は、今を盛りとはしゃいでいるが、もとはすべて長嶋茂雄という人物に帰されるのである。

2021.12.20.